

2022年12月11日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

詩編 33 : 4~15

ローマの信徒への手紙 8 : 26~30

「わたしの神またわたしの父」

(ハイデルベルク信仰問答 問 26) ※問答は「日々の祈り」をご覧ください。

【前奏】

【招詞】 イザヤ書 40 : 4~5

【祈祷】

【聖書】 詩編 33 : 4~15、ローマの信徒への手紙 8 : 26~30

【説教】 「わたしの神またわたしの父」

<使徒信条>

10月から、『ハイデルベルク信仰問答』という信仰の学びの本を用いて、御言葉の説教を聞いています。今日からは、「使徒信条」という信仰告白の文章の中身を、ひとつずつ丁寧に紐解いていきます。

「使徒信条」とは、聖書全体から、教会が信じるべきことが要約された信仰の簡条です。今、わたしたちの教会でも、ここに述べられている信仰を受け継いで、礼拝の中でこれを告白しています。

この「使徒信条」は、三つの段落からなり、それぞれ、父なる神、子なる神、聖霊なる神の項目となっています。

この三つの段落からなる「使徒信条」の構造が、聖書が語る神さまが、まことの唯一の神であり、また父、子、聖霊なる三位一体の神さまである、ということを告白しています。

今日と次週の礼拝では、その一段落目、父なる神さまについて、わたしたちが何を信じているのか、ということ、改めて深く心に刻みたいと思います。

<父なる神>

さて、「使徒信条」の父なる神さまについて、ハイデルベルク信仰問答の問 26 の問答を見てください。このような問いです。「『われは天地の造り主、全能の父なる神を信ず』と唱える時、あなたは何を信じているのですか。」

その答えは、とても長いですね。まず一区切り目のところまで読んでみます。

「天と地とそこにあるものを無から創造され、それらを永遠の熟慮と摂理とによって今も保ち支配しておられる、わたしたちの主イエス・キリストの永遠の御父が、御子キリストのゆえに、わたしの神またわたしの父であられる、ということです。」

[創造]

ここにはまず、神さまが万物を、無から創造されたことが語られています。

旧約聖書の一番はじめ、創世記の第一章には、混沌と闇に、神さまが「光あれ」と言われると、光があった、と語られています。

つまり、この世界は、神さまの御言葉によって造られた、ということです。それは、神さまのご意志によって、この世界が存在している、ということです。

反対にいうと、この世のすべてのものは、もちろんそれはわたしたちも、神さまの御言葉なしに、神さまのご意志なしに、存在することはできない、ということです。

この世界の存在には、神さまのご意志がある。御心がある。これが、神さまが世界を造られたと信じる、ということなのです。

ですから、旧約聖書の創造の物語は、科学とか、進化論とか、そういったものと対立するものではありません。まったく、語ろうとしていることの目的が違うのです。

科学などは、この世界や、宇宙の成り立ち、また構造を解明しようとするものです。しかし、なぜこの世界が存在しているか、その意味を語ることはできません。

聖書の創造物語は、なぜこの世界が、わたしたちが、ここに存在しているかを語ります。それは、神さまのご意志に基づいて存在している、ということであり、神さまにあって、この世界には意味がある、ということなのです。

「天と地とその中にあるすべてのもの」は、無から、神さまのご意志によって、神さまの御言葉によって、創造されました。神さまによって、存在せしめられました。

ですから世界のすべてのことは、今も、そしてこれからも、神さまのご意志の許にあります。それは、世界をお造りになった神さまご自身が、この世界のことを、心にかけて、見つめ、導き、そしてすべての責任を負って下さる、ということです。

それが、先ほどの答えにあった、「それらを永遠の熟慮と摂理とによって、今も保ち、支配しておられる」ということなのです。

[わたしの父]

しかし、この間 26 の父なる神の項目の中心は、神さまが創造主で、摂理をもってこの世界を保ち、支配しておられる、ということではありません。

この問いの中心は、無から御言葉をもって万物を存在せしめる創造主であり、永遠の熟慮と摂理をもってすべてを支配しておられる神が、御子キリストのゆえに、「わたしの神またわたしの父であられる」ということなのです。

この世界を創造し、支配し、導いておられる神が、わたしの父であられる。この神が、父として、造られたわたしのことを愛し、憐み、保護し、守り、導き、救って下さる。

わたしたちは、そのことを確信し、このような神を、「わたしの父」と親しく呼ぶことが出来るのだ。そのように、教えられているのです。

しかし、今日の答えを見ますと、まずこの神は、「わたしたちの主イエス・キリストの永遠の御父」であると語られています。神は、独り子なるイエスさまの父であります。まことの神の御子は、イエスさまただお一人です。

本来、世界をお造りになった創造主である神と、造られたわたしたち、被造物である人間との間には、圧倒的な、決して超えられない隔たりがあります。神は、神であります。わたしたちは造られたものに過ぎません。神さまの御心がなければ、存在することが出来ない者です。しかもわたしたちは、その造り主である神さまの御心に、背いて生きています。

旧約聖書の時代、人間は、聖なる神さまの御前に、簡単に出ることはできませんでした。神さまの顔を見たなら、被造物であり、罪人である人間は、必ず死ぬと言われていたのです。

しかし、神さまは、独り子イエスさまを、わたしたちの罪の贖いのために、この世に遣わして下さいました。御子イエスさまが、わたしたちの罪を拭い去り、神と共に生きる者とするために、まことの人となって、この世に来て下さいました。

この神の御子イエスさまが、わたしたちの罪を贖い、わたしたちを聖なる者として下さるゆえに、神の子として下さるゆえに、イエスさまはこう言って下さったのです。

わたしがあなたがたの罪をすべて担うから、わたしにあつて、あなたがたも神を、「我らの父よ」と親しく呼んでよい。信頼しきった幼い子どものように、あなたがたもまた、あのお方を、「わたしの父」と呼んでよい、と。

ですから、神さまが「わたしの父」であられる、ということは、まことの神の御子イエスさま抜きでは、わたしたちには知ること、考えることもできないことなのです。

わたしたちは、問答の答えにあつたように、「御子キリストのゆえに」、イエスさまの救いの御業のゆえに、イエスさまの父なる神さまが、「わたしの神またわたしの父であられる」と言うことが出来るのです。

この神の独り子イエスさまが、十字架と復活の出来事によって、父なる神さまの愛を示し、罪の赦しを得させて下さったゆえに。わたしたちは、イエスさまによって、神さまが、愛をもってわたしたちを創造し、愛をもってこの世界を導き、そして、わたしたちの父でいて下さる方である、と信じる事が出来るのです。

<益としてくださる>

神の御子イエスさまが、父なる神さまのわたしたちへの愛を示して下さいました。

それは、御自分の大切な独り子を犠牲にしてまでも、十字架につけてまでも、神さまに背き、離れてしまった、被造物に過ぎないわたしたちを、罪と死から救い出して下さる。わたしたちが神さまと共に生きることを望んで下さる。それほど愛です。

この父なる神さまの愛の御心の許に、わたしたちは存在し、この世界を生き、人生を歩んでいるのです。

だからこそ、問 26 の答えの続きにあったように、こう信じる事が出来るのです。

「わたしはこの方により頼んでいますので、この方が体と魂に必要なものすべてをわたしに備えてくださること、また、たとえこの涙の谷間へいかなる災いを下されたとしても、それらをわたしのために益としてくださることを、信じて疑わないのです。」

わたしたちは、「涙の谷間」を歩む時があります。今まさに、そうであるという方もあるかも知れません。この「涙の谷間」は、ラテン語に訳される時には、「悩み多い生涯」と書かれていました。

涙を流さない人生、悩みのない生涯、というものは、決してありません。どうしてこのようなことが起こるのか。どうしてわたしはこのような境遇なのか。どうしてこのような苦しみ、悲しみがあるのか。そう思わずにはいられないことがあります。

もし、そのような出来事が、運命であったり、偶然であったり、どうしようもない出来事であるなら、わたしたちは涙の谷間に沈むしかありません。正体不明の、抗えない何かかわたしを押し流したのなら、それに身を任せていくしかなく、「どうして」と問うことは無意味なことになるでしょう。

しかし、この世界をお造りになったのは、わたしたちの父である神さまである、ということを知る時。そして父なる神さまは、御子イエスさまが示して下さったように、わたしを愛しておられる、わたしの父であられる方だと信じる時。

わたしたちは、この父なる神さまにこそ、「どうして」と問いかけることが出来ます。この父なる神さまにこそ、御心を問いかけてよいのです。悩みを、嘆きを、この父なる神さまにこそ、叫んでよいのです。

しかしまた、わたしたちは、この父なる神さまを、御子イエスさまを通して知りました。イエスさまの十字架の苦しみと死を通して、そして復活の命を通して、父なる神さまを知りました。

その時、わたしたちは、この父なる神さまが、独り子なるイエスさまの命を惜しまず与えるほどに、このわたしを愛しておられる、父なる神さまであることを知るのです。

そうであるならば。そのような父なる神さまであるならば。たとえ、涙の谷間へ災いを下されるようなときであっても、このお方が愛をもって、必ずあらゆることを「わたしのために益としてくださる」。そう信じる道が、拓かれていくのです。

今日読まれたローマの信徒への手紙 8 : 28 にはこうありました。

「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということ、わたしたちは知っています。」

わたしのために益としてくださる。万事が益となる。

この「益」というのは、わたしの思い通りにいくことや、願いが叶うことではありません。わたしたちにとっての本当の「益」とは、ただ一つの慰めを知ることです。生きるにも、死

ぬにも、わたしがイエスさまのものであると、確信することなのです。

…わたしたちには、さまざまなことが起こります。しかし、この世界には、神さまの愛の御心がある。わたしたちは神さまの愛によって存在している。神さまは、わたしたちの父として、生きるにも死ぬにも失われることのない、本当の、唯一の慰めへと、必ず導いて下さる。わたしたちは、そう信じてよいのです。

<全能の神、真実な父>

問 26 の答えのところには、「それらをわたしのために益としてくださることを、信じて疑わないのです」とありました。信じて疑わない。

しかし、わたしたちは、自分がそう言い切れるだろうかと思います。信じて、疑わない。わざわざここまできっぱりと書かれているのは、反面、わたしたちが不信に陥りやすく、疑い深いことを見透かされているようです。

でも、こうきっぱり言い切る理由は、わたしたちの信じて疑わない心のゆえではなく、神さまの方に、わたしたちが信じて疑わずにいられる理由があるからなのです。

それは、答えの最後の段落のところですか。「なぜなら、この方は、全能の神としてそのことがおできになるばかりか、真実な父としてそれを望んでもおられるからです。」

なぜなら、この方は、全能の神としてそのことがおできになる。そう語られています。

神さまが、全能の神であられるから、わたしたちは、すべてのことを神さまがわたしのために益として下さることを、信じてよいのだ。疑わなくてよいのだ。そう言っているのです。

全能。完全であること。何でもできること。わたしたちはこのことを、無から御言葉によって万物を創造される、その大いなる力のことを、思うかも知れません。また、奇跡を起こすことができる力。わたしたち人間には出来ないことが、お出来になること。そのような力のことを思うかも知れません。それももちろん、神の全能の力と言えるでしょう。

しかし、神さまの全能が最も表されたのは、愛においてです。

わたしたち人間は、自分の「愛」というものが、不完全であること。愛において、裏切りや、挫折があること。あるのか、ないのかさえ、あやしいものであることを知っています。

しかし、神さまは、愛を全うすることがお出来になります。神さまの愛は、完全です。そして、わたしたちを最後まで愛し抜くことが、お出来になります。裏切ったり、途中で諦めたり、投げ出したりなさることは、決してありません。

わたしたちを完全に愛して下さるその御力。わたしたちを愛するためになら、何でもおできになること。それが、神さまの全能なのです。

神さまは、わたしたちへの愛のゆえに、御自分の愛する独り子イエスさまの命を、わたしたちに与えることさえお出来になります。

そして、父なる神さまの御心に従われた御子イエスさまは、わたしたちの救いのために人

となり、神の身分さえお捨てになりました。御自分は罪がないにも関わらず、わたしたちの罪をすべて担われました。わたしたちの代わりに裁きを受け、十字架につけられ、痛みも、苦しみも、嘲りも、裏切りも、あらゆる悩み、苦しみ、痛みを受けられました。わたしたちの代わりに、呪いの死を、引き受けられました。

すべて、わたしたちのためです。わたしたちへの愛のためです。わたしたちのために、何でもすることがお出来になる。神の全能とは、この愛にこそ、表れているのです。

このような、全能の神だからこそ、そのことがおできになる。この方が、体と魂に必要なすべてのものを備えてくださる。涙の谷間へ、いかなる災いを下されたとしても、それらをわたしのために益としてくださることがお出来になる。わたしたちに、ただ一つの、まことの慰めを与えることがお出来になる。

だからわたしたちは、御子キリストのゆえに、わたしの父となって下さった、この全能の神を、疑わないで、信じて、より頼んでよいのです。

最後に、「真実な父としてそれを望んでもおられる」とありました。神さまご自身が、わたしたちの父として、そうしたいと望んでくださっている、というのです。

わたしたちの体と魂に必要なものすべてを備えることを、望んでくださっている。わたしたちを涙の谷間から救い出し、すべてをわたしのために益とすることを、望んでくださっている。わたしたちに、体も魂も、生きるにも死ぬにも、キリストのものであるという慰めを与えることを、望んでくださっているのです。

わたしたちを、ご自分の愛する子どもとして、すべての力を尽くして、真実な父として、なんでもしてやりたいと望んで下さっているのです。

このような神が、御子イエスさまのゆえに、わたしの神またわたしの父であられるのです。なんと驚くべきことでしょうか。

わたしたちは、創造主であり、万物を支配し導かれる、全能の神を、今、イエスさまのゆえに、「わたしの父」と親しく呼び求め、より頼みむことが出来るのです。

「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず」と唱えるとき。わたしたちは、このような父なる神さまを信じ、その恵みに生かされていることを、告白しているのです。

【お祈り】

天の父なる神さま、その御言葉によって無から万物を、そしてわたしたちをお造りになり、あなたのご意志と摂理によって、世界のすべてを、今も保ち支配しておられる、イエス・キリストの父なる神さま 御名をほめたたえます。

御子イエスさまのゆえに、わたしたちが、あなたのことを「わたしの父」と親しく呼び求め、より頼むことをゆるして下さり、心から感謝いたします。

わたしたちは、イエスさまの十字架の死と復活において、あなたがわたしたちのために、すべての力を尽くして、その全能の御力をもって、愛し抜いて下さることを知らされました。

そのゆえに、あなたがわたしたちのすべての必要を備え、また涙の谷間へ災いを下されても、あなたが真実な父として、万事をわたしのために益としてくださることを信じます。たった一つの、まことの慰めを与えて下さることを信じます。

わたしたちを、ますますあなたの恵みへ、慰めへと、近づかせてください。

このお祈りを、主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

【讚美歌】 1 2 「とうときわが神よ」

【信仰告白】 使徒信条

【献金】

【主の祈り】

【讚美歌】 2 5 「父、子、聖霊に」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、
あなたがた一同と共にあるように。アーメン